

## WEB きくみんリレートーク N04

保健所は、感染症、医事全般、精神保健、災害医療、環境衛生等々様々な事象を取り扱っています。「地域にある資源を把握」し、それらを「うまく連携」させて、「最大限効果的な活動にする」ということをしています。在宅医療は、多くの人材や機関が関わって成り立ちますので、こういった様々な人材・機関の橋渡しをすることで、保健所も在宅医療に関わっていきます。

コロナ禍では、在宅医療・介護の重要さを、痛感いたしました。元々、自宅で訪問医療や看護、介護を受けている人は、家族だけでは負担が大きい医療や介護を受けている人、自力移動がままならない人など、それなりの理由があります。

しかし、患者様がコロナに感染されると、訪問系のサービスが一気に止まってしまう、患者様やそのご家族が途方に暮れてしまうというようなことがよくありました。元々サービスを受けないと生活していけないような方々が多いのに、その上

コロナで看護・介護する家族も具合が悪く、ますます対応が困難となっていました。保健所には、電話で毎日状況を確認することしかできません。無力です。コロナという「病気」になった今こそ、一層のサービスをお願いしたいところなのに…と歯がゆく思うこともしばしばでした。また、患者数が急増した第7波以降は、県内全域で病床・医療がひっ迫し、本来なら入院して頂きたいご高齢で介護度の高い患者様が、自宅療養を余儀なくされました。入院できない以上、在宅で対応するしかないと思いましたが、コロナ患者の在宅サービスに対応して頂けるところは決して多くはありませんでした。

コロナ自体は軽症でも、ご高齢ですので、食べられない、なんとなく弱ってしまうといった状態になり、そのままお亡くなりになることもありました。ご高齢の方が、ちょっとした病気を契機に、弱って、亡くなる、というのはある意味自然な経過ではあるにせよ、ご本人やご家族が納得できる「尊厳のある死」であったのだろうか、と今でも悶々としています。

ハンセン病、結核、エイズといった感染症でも、我々は同様の経験をしてきました。現代でも同じことが繰り返されていることが悲しくてなりません。我々医療のプロフェッショナルが、感染症を正しく恐れた対応ができないのなら、誰にできるのでしょうか。一日も早く、コロナ患者様たちの尊厳が損なわれることなく、十分な医療・介護を受けられるような地域になることを願ってみません。



熊本県菊池保健所

所長 剣 陽子

次は 大塚薬局 大塚様にリレーします。